

I 実践

1 研究テーマ

「自他を大切にし、思いやりの心をもって活動する児童育成のための実践の工夫」

—自己肯定感を高めるとともに、みんなを大切に—

(1) 主題設定の理由

本校の児童は、元気で明るく素直である。しかし、些細なことから友だち同士でのトラブルや軽はずみな行動などが見られることがある。これらは、学級や友だち同士の人間関係の希薄化、家庭での道徳性の低下などの原因が考えられる。

そのため、学校教育においては人権の知識理解をいっそう深めるとともに、児童一人一人が人権感覚を十分に身に付けるための指導をいっそう充実することが必要である。また、人権教育が目指すものを明確にし、教職員がこれを十分に理解して計画的に進めることが重要である。

そこで、本校では自他を大切にし、思いやりの心をもって活動する児童の育成を研究主題とした。

(2) 研究のねらい

学級を基本として、学校教育全体で取り組むことが重要と考える。そして、自分を大切にす人権感覚を育成することにより、自他を認め合う力を付ける活動の支援をし、人権教育の啓発を図り、思いやりの心と助け合いの心をもった児童を育成することをねらいとしている。

教職員の研修を行うことにより、児童の一人一人についての理解を深めることとともに、人権についての理解と啓発を促し、学校全体で児童の人権教育に当たる。

(3) 実践内容

ア 各教科・領域の学習を通し、思いやりの心を育て、公正公平な態度を養う。

イ 教員研修により、人権意識の高揚と力量のアップを図る。

ウ 異学年交流を通して、思いやりの心を育み、自他の立場や気持ちを考えて公正公平にふるまう態度を養う。

エ 草花の栽培、清掃や奉仕活動を通して、生命の大切さを理解し、ボランティアの精神を養う。

オ 人権メッセージの作成に、保護者への協力を求めたり作品の掲示や啓発を図ったりすることで人権について考える機会を図る。

(4) 実践例

ア 学級の指導から

1年生は、小学校への入学・学校生活の始まりという観点ではとても大事な学年である。全学年で、人権を尊重する教育として具体的に友だちや自分の良さをワークシートに書いて教室に掲示し継続することで肯定感を図ったり、学級で話し合ったりしていじめや平等・偏見のない友だちの接し方をスキルとして学習を続けてきた。「友だちに優しくしよう」などの内容の題材を用意して、みんなの感情・気持ちを話し合いソーシャルスキルトレーニングとして、どうして友だちに接したらいいのかを考える指導をしてきた。また、「ありがとう」と言う機会を見逃さず、きちんとすることができたかどうかを一人一人の児童に訴えながら考える指導をしてきた。その結果「ありがとう」というスキルを多く練習した。友だちに対しての人権、やさしさにつながる「ありがとう」と言う言葉の実践力につながっていった。

・「サンキュー週間」(毎月3日～9日)

学校全体(道徳)としての取り組みとして、環境委員会が担当。○3回◎5回◎10回3種類のシールを選び、帰りに昇降口で月ごとの掲示に貼って1日を振り返る。

・「教室の道徳コーナー」の設置 「ありがとうの木」「ふわふわ言葉とちくちく言葉」など

・道徳公開授業(2学期)

・人権ビデオ視聴から

児童は、今年も1学期に人権ビデオを視聴した。いじめを理解しやすい内容のものとした。「勇気あるほたるととべないほたる」(1～3年)と「夕映えのみち」(4～6年)を視聴した。「勇気あるほたるととべないほたる」は、アニメーションのビデオであり、羽がちちんで生まれたためにとべないほたる。彼を助け励ます仲間たち。足の不自由な妹の為にほたるをとりに来た姉と弟。ほたると子どもたちとのふれあいを通して、やさしさと思いやりの大切さを描いた内容のロングセラーである。児童は、どの学級も静かに真剣に視聴できた。羽がちちんで生まれたほたるの理解はできたようであったが、ほたるを見たことのない子どもにとっては、足の不自由な妹を喜ばせようとし、ほたるをとりに行く姉弟の気持ちもやや抽象的であった。障害のある人へのやさしさや思いやりを感想に書いている子はなかった。とべないほたるのために、協力するほたるたちの思いやりやささしさ、ほたるを楽しみにする足の不自由な妹を喜ばそうとする姉弟の気持ちは、あまり理解できないようであった。「やさしくしたい。」「協力したい。」などの感想をほとんどの子が書いていたので、やさしさは理解できているようであった。児童は皆、「やさしさや協力」は大切だということは分かっているが、具体的な場面を学習することで、人権に対する意識を高めていく。「夕映えのみち」は、インターネット社会で、無責任なうわさ話や根強い偏見が元になり、人権の侵害につながる危険性を学ぶ内容になっている。友だちへの嫉妬心で、軽い気持ちでインターネットに書き込んだことから、大きな問題に発展してしまい学校で保護者会を開くようになってしまう内容である。高学年であれば、興味のある内容で、身近な問題である。ちょっとした意見の食い違いから起こりそうな内容であり、1度書いてしまったことは、消えないということも分かって、自分で止められるようにしなければならないことが分かったと思う。事前にインターネットの情報についての知識を学ぶことができて、よかったと思う。

イ 校内研修の取り組み

本校では、毎年夏季休業中に人権教育の研修を位置づけている。今年の人権教育研修では「人権教育」や「いじめ」等は、学級担任や教師が子供や相手の身になって人権意識を高くもち、声かけをしたり変化に気づいたりすることで、児童の教育に自然に身につくことができるものであるという兵庫県の先生の講話の伝達講習を行った。特別支援に在席する児童の交流学級での在り方や居住地交流の受け入れなど、人権教育の大切さを今後もさらに工夫して校内の先生方と一緒に研修を重ね、人権感覚を磨いていけるようにしたい。

ウ 毎週木曜日のゆうゆうタイム

学級遊びを主とし、月1回程度で兄弟学年学級での遊びを上級学年が中心に考えて遊ぶ。遊びの内容の計画から活動まで熱心に取り組む、上級学年生はお互いが楽しめるように、積極的に面倒をみる場面をみることができた。その他の活動でも兄弟学級で活動することを取り入れている。(本の読み聞かせなど)

エ ボランティア、学年花壇や一人一人の植木鉢、金魚やめだかなどの飼育

魚に名前を付けたり水替えをこまめに行うなど世話をしながら、命の大切さについて実感している。ボランティアは、全学年で海岸清掃に参加した。また、卒業式に向けて学級では、プランターで花の栽培をして、思いやりの心が育っている。

オ 人権ポスター、人権メッセージ

夏休みの課題として全員参加を呼びかけた。低学年は各家庭でも人権について子供と一緒に考える機会として、保護者の啓発も図った。優秀作品は人権啓発センターに送った。全員の人権メッセージは、学級ごとに廊下に掲示した。

2 研究の成果と今後の課題

人権教育についての実践から、各学級の活動や道徳の題材や人権のビデオ視聴などを通して、自分と友だちと深く考えることを多く取り上げて指導し、児童の自覚を深めることができた。本年度の学校目標は、「あいさつ・感謝・外遊び」を合い言葉に、教師が常に感謝の気持ちを持ち人権感覚をもつことで人間関係がより良くなっていくものである。人権教育を絶えず働きかけて人権意識を高められるように支援し、家庭や地域に人権教育の理解と啓発を深めていきたい。